

# 欧米を魅了した明治のキモノの探究を通して染織文化を 未来につなぐ被服学習の開発

高橋美与子 柴 静子 日浦美智代 一ノ瀬孝恵  
木下 瑞穂 高田 宏

## はじめに

平成25年度には、広島大学学部・附属学校共同研究として、附属福山高等学校の「家庭基礎」において「海を渡ったキモノから染織の日本を再発見する衣生活学習の開発」というテーマで、日本衣装の伝統と文化の理解を基軸とした授業研究を試みた。

この研究を始めるに当たり、類似の刺繍模様をもつ「小袖実物」と「古裂実物」そして「打掛写真」の三者を準備し、それぞれの見え方について生徒にアンケートを行った。その結果、地模様や刺繍について観察するためには実物が必要であるが、色や模様の形については写真を見ることでも理解できることが明らかになった。とはいえ、班ごとに1点ずつ配布した実物衣装の影響力は大きかった。

明治の近代化に際して外貨獲得と文化の発信という両面で貢献した輸出用キモノ(ドレスリング・ガウン、キモノ風室内着、イヴニング・コート)の観察は、生徒の関心を高めるとともに、ものづくりの精神のあり方についての理解を深めた。授業に際しては、輸出用の生糸の梱に付けた商標の再現や映像収集などを行い、豊富な学習環境を作った。授業前後に実施した調査の結果から、多くの生徒が明治期の輸出キモノに関心をもち、特に刺繍に興味を示して、学習後にはキモノが好きだ、民族衣装としてのキモノを誇らしく思うといった生徒が増えたこと、生糸のみならず絹製品が近代化に貢献したことなど、歴史的事実を深く理解したことが明らかになった。

調査を通して、この学習が適切であり効果が多大であったことが証明されたが、次の3点は研究課題として残された。

①明治期に西欧に渡り、日本文化への熱烈な興味と理解をもたらすことになった輸出用キモノについて

は、布の厚み計測器を導入するなどしてより精緻に観察できるようにすること、②学習のまとめとして、布を用いた小物製作をさせること、③幕末・明治から現在、未来へとどのように衣装文化を繋いでいくかについて具体的に考えさせること、という3点である。

そこで平成26年度の研究においては、以上の課題の解決を主眼とした授業を開発し、実践・評価・再構築して、普及可能な学習モデルとして提案することを目的とした。

## I. 明治期のキモノの探究を通して染織文化を未来につなぐ被服学習の開発と実践

### 1. キモノの探究を通して染織文化を未来につなぐ被服学習開発の枠組み

平成25年度に開発した「海を渡ったキモノから染織の日本を再発見する衣生活学習」の効果をアンケートや映像分析などを通して検討し、それを踏まえて平成26年度に取り組む改善プログラム「明治期のキモノの探究を通して染織文化を未来につなぐ被服学習」の枠組みを構想した。下記の通りである。

①着物に関する歴史を知り、これのもつ平面構成や絹地に日本刺繍が多く使用されてきたことの意味を理解する。古今の被服の材料と特性について知る。②ファッションのジャポニズムと着物の「ちから」について理解する。③日本の幕末・明治の着物が西欧を魅了したことをエビデンスに基づいて理解する。④ドレスリング・ガウンを通して、横浜の絹物商椎野正兵衛のものづくりの精神を知る。⑤京都の飯田高島屋(飯田新七)と千總(西村總左衛門)の活動(京都の復興と欧米向け輸出キモノの考案)を知る。⑥実物衣装を

手にとってよく調べる。(椎野商店、高島屋、千總の実物衣装：ドレッシング・ガウン、イザニング・コート、キモノ風室内着)。⑦「モードのジャポニズムの図録」を使用して不思議な衣装の解明を図るとともに、刺繍の技法、衣装の構成、布地などを観察する。幕末の刺繍打掛や小袖と比較して、継承発展しているものは何かを発見する。⑧実物衣装に使用されている絹布の観察と厚みの測定。明治時代の絹地と現代の絹地の厚みを比較し、前者ではより薄い絹が織られていたことに気づく。⑨絹織物の伝統を福島県川俣町で引き継ぎ発展させている「齋栄織物」のものづくりに焦点を当てる。⑩絹文化を継承し発展させるためには日本人は何をすればよいのかについて、グローバルな視点から考える。そして足下から行動するにはどうすればよいのか、考えを交流する。⑪明治期の「ものづくりの精神」を継承発展させて、様々な布で絵本を含む各種の遊び用具を作り、「ももやま保育園」での幼児とのふれあい体験で使用する。

以上のように、改善プログラムをデザインし、授業実践に移った。

## 2. 授業実践の概要

授業実践は2014年9月8日～11月28日の13時間をかけて、附属福山高等学校で実施した。授業者は高橋美与子教諭であり、1年生の1クラス、計40人(男子20人、女子20人)を対象とした。

本授業では、以下のような考えから被服学習と保育学習を関連させて今回のテーマである「欧米を魅了した明治のキモノの探究を通して染織文化を未来につなぐ被服学習の開発」のねらいを達成させることとした。

今日、現在及び将来の家族の一員としてのあり方、様々な年代の人たちとの関わり方、また持続可能な生活のあり方、情報の受け止め方など、生徒が自らの生活について振り返り、どのようにありたいのかについて考えねばならない課題は多い。しかし殆どの生徒は、目前の課題をこなすことで精一杯であり、また家族に全面的に依存した生活を送っているため、そのような課題について考える時間や機会をもつことがない。それゆえに、目まぐるしく変化していく現代社会にあっても、自らを見失わない土台となる考え方や知識・技術を授業の様々な分野を通して身につけさせ、主体的に生活を創造していく自立した生徒を育てることを目標にしている家庭科の担う役割は大きい。

今回実践した被服の授業では、その土台となる考え方の一つとして、「ものづくりの精神」を取り上げた。ここで言う「ものづくりの精神」とは、「ものとは人

の暮らし・心を豊かにするための道具であり、作り手が使う人のことを考えて作る時にこそものには命が宿り輝きを増す。」という明治期の横浜の絹織物商、椎野正兵衛の考え方である<sup>1)</sup>。このような考え方は、同時期に活躍した京都の絹物商、飯田新七や西村總左衛門にも見られる。そこで、彼らが精魂を込めて製作し、欧米に向けて輸出した絹地に刺繍のドレッシング・ガウンやキモノ風室内着の実物に触れさせ、調べ活動を通してその価値を実感させたいと考えた。

椎野、飯田、西村のものづくりの精神やキモノが欧米のファッションに及ぼした影響を理解させ、その心を活かして保育学習の一環として訪問する保育園の子どもたちへのプレゼントを布を中心的に用いて製作させる。このように、誰かのためにもものを作るといった体験を通して、生徒たちに自分にとっての「ものづくりの精神」とは何なのかを考えさせたい。この学習において、生徒は、手作りの作品が人と人との心を繋ぎ、絆を深めるということに気づいたり、使い捨てる消費社会に対して疑問を持ったり、一人ひとりが自分の生活や社会のあり方を振り返るきっかけを得ることができ、またプレゼントの製作に布を用いることで布の持つ魅力を目と手で感じるができる考えた。

このように、グループやクラスで保育園児へのプレゼントを作り上げることを通して、布の持つちからと人と人の繋がりを感じさせ、日本の染織文化ともものづくりの心を未来へつなぐことを意図して、今回の授業をデザインした。

### (1) 本授業の評価規準と指導計画

授業の評価基準と指導計画は、次の通りである。

#### (i) 評価規準

##### (ア) 関心・意欲・態度について

・キモノの歴史、構成、デザイン、刺繍及び椎野正兵衛、飯田新七、西村總左衛門らの「ものづくりの精神」や伝統の継承の意味などに関心を持って学習し、それを基にして自分の衣生活を振り返り、改善に役立てていこうとする。

##### (イ) 思考・判断・表現について

・キモノに関する様々な情報を通して自分の生活をクリティカルシンキングすることができる。  
・保育園へのプレゼントの製作やグループでの話し合い・発表の場で自分のアイデアや工夫点・考えを持ち、わかりやすく表現し、互いにアドバイスすることができる。

##### (ウ) 技能について

・「ものづくりの精神」や布のちからを活かしてももやま保育園の子どもたちへのプレゼントを製作し、

子どもたちに思いを伝えることができる。

### (工) 知識・理解について

- ・キモノにまつわる絹織物・刺繍の知識，またキモノが世界に及ぼした影響などの歴史的事実に関する知識を身につけている。
- ・椎野正兵衛の「ものづくりの精神」の意味を理解し，自分の生活を振り返るための視点を見つけることができる。

### (ii) 指導計画

今回の学習には保育園訪問を含めて16時間を当てた。時間配分は以下の通りである。

- ①欧米のファッションへのキモノの影響・・・2時間
- ②明治時代に輸出されたキモノの検証・・・3時間
- ③ものづくりの精神について・・・・・・・・1時間
- ④プレゼントの製作について・・・・・・・・8時間
- ⑤ももやま保育園訪問実習・・・・・・・・2時間

## (2) 指導内容及び生徒の感想・気づき等

指導計画の①～⑤(計16時間)に示した授業の内容は以下の通りである。

### (ア)「指導計画①の計2時間」の内容

指導計画①の2時間は，キモノの歴史や構成，欧米のファッションへの影響などについて様々な角度から考えさせる時間とした。

#### ①手作りのキモノについて

日本のキモノは全て手縫いで作られており，少し前までは家族のキモノは母親や祖母らが手作りしていた。親から子へ孫へと受け継がれていくものも多くあったということなど，手作りの意義を確認させた。

#### ②キモノの歴史と特徴について

「キモノの文化を探る～ルーツ・変遷・構成(教育図書)」のビデオを視聴させ，時代と共に形がどのように変化してきたのかということと，直線裁ちであるという構成上の特徴から，縫い直しが容易であるため，極めて経済的で，環境に優しい衣装であるということを理解させた。

#### ③欧米のファッションへの影響について

ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵の衣装を写真にしたトランプを並べたり，「ファッションデザインのジャポニズム①」(1994年5月24日，NHK教育放映)のビデオの前半部分を視聴することを通して，欧米の女性用のドレスのデザインがコルセットでウエストを締め付けた形から体に沿うようにゆったりとした形へと変化していったことを発見させ，その変化には日本のキモノのデザインが大きく影響していたことを理解させた。

### (イ)「指導計画②の計3時間」の内容

指導計画②の3時間で，キモノが欧米のファッションを転換させたことについて検証していった。

#### ①絵画のジャポニズムから

「地理学者」(1669年，フェルメール)，「陶磁の国の姫君：バラ色と銀」(1864年，ホイッスラー)，「ラ・ジャポネーズ(日本娘)」(1876年，モネ)，「エリオ夫人」(1882年，ルノワール)，「花魁(おいらん)」(1887年，ゴッホ)の5枚の大型絵画ポスターを見せて，どの絵にも共通することを探させた。生徒は，日本のキモノが描かれていることに気づき，自分たちがよく知っているヨーロッパの有名な画家たちも日本の文化やキモノに魅了され，その美しさを自らの作品に描こうとしていたことを見出した。それほどに日本のキモノは，芸術として魅力的なものであると受け止められていたことに気づくことができた。

#### ②アメリカの美術館所蔵のキモノの写真から

明治時代には海外の著名人，知識人などが数多く日本を訪れ，美術品やキモノなどを大量に購入して自国に持ち帰った。現在，それらの多くは美術館などに寄贈されている。今回，「在外日本染織集成(長崎巖，小学館，1996)」を解体し，1枚ごとにラミネート加工をしたキモノ写真シートを作成した。約100枚のシートを生徒に配布し，アメリカの「メトロポリタン美術館」，「シアトル美術館」，「シカゴ美術館」などに収蔵されている，豪華な刺繍や絞り・染色などが施されている江戸期の小袖や庶民が日常生活で着用していたような野良着まで，様々なキモノの写真を見せた。生徒たちは，キモノの素晴らしさに写真を通してではあるが触れることができ，次のような気づきを残している。

- ・思い切った色使いだと思った。一体どんな場面でどんな人が着たのだろうか。
- ・全体的に暗い色だけど蝶の部分鮮やかで目立っていて綺麗だ。
- ・斜めの縞模様色の移り具合がホワーとしていて好き。よく見ると，1本1本色が変わっているところがあってそこもいい。
- ・紺と金の中に白の燕がいて好き，というかこの紺色が好きだ。

#### ③明治期の実物衣裳の観察と布の厚みの計測

明治時代に輸出されたドレッシング・ガウン，キモノ風室内着，イブニング・コート等を班に1枚ずつと「モードのジャポニズム展」の図録を2人に1冊ずつ配り観察させた。生徒たちは，どの衣裳にも精緻な刺繍が施されており，まずその細かさや美しさに興味を持って触れたり着用したりしていた。さらに，図録の中に実物衣裳に良く似た写真を見つけて，手元にある

衣装と同じようなものが明治時代に多く輸出され、欧米の人たちが部屋着として着用していたことを発見することができた。なお写真1は、生徒に観察させた実物衣装のうちの3点であり、左から2番目は刺繍部分の拡大写真である。

実際に手に取ることで衣裳の布地の薄さや軽さを感じ取ってから、布の厚み測定器（尾崎製作所、アップライトゲージ「PEACOCK No25」）を使い、各衣装の表地や裏地がどの位の厚みであるのかを測定させた。その結果、一番薄いものは、キモノ風ガウンの裏地（絹：平織）で、0.048mmであるということが判明した。比較するために測定した生徒の制服のカッターシャツやブラウス（綿とポリエステル混紡）は0.204mm、現代の絹織物の中でも世界一薄いといわれている齋栄織物が作り出した「妖精の羽」という名前の絹地は0.078mmであった。測定を通して、明治期の絹地は現代の布地と比較しても驚くほど薄く織られていたことが分かった。実際に触れて感じたことを、布の厚み測定を行うことで科学的に確かめることができたことで、それだけ薄い絹織物を作りだしていた明治時代の技術が卓越していたことに生徒たちは感嘆していた。

#### ④実物衣装の刺繍について

明治期の輸出用キモノに欠かせなかった刺繍について理解を深めるため、ビデオ「美の壺・刺繍」（2010年6月4日、NHK教育放映）を視聴させた。視聴を通して、日本刺繍の歴史や多様な技術など刺繍についての知識を得るとともに、身近な人の幸せを願いながら一針一針刺して完成させていくことで、作り手の心を込めることができ、より素晴らしい作品に仕上がっていく、という映像表現から、生徒は手作りの意義についてさらに深めることができた。

昔からの刺繍の技に自分なりの改良を加え、伝統を受け継いでいっている人たちの技術は素晴らしいこと、そして身近な人のためにその人のことを思いながら刺繍することは幸せなことであるという、これから学習する「ものづくりの精神」に秘められている2つの大切なポイントをおさえることができた。

#### (ウ)「指導計画③の1時間」の内容

ももやま保育園の子どもたちへのプレゼント製作に活かしたい「ものづくりの精神」と「日本の染織文化を伝える」ということについて考えさせた。

#### ①椎野正兵衛の「ものづくりの精神」

「ファッションデザインのジャポニズム①」のビデオや「モードのジャポニズム展」（図録）の中に登場している椎野正兵衛を取り上げた。

正兵衛は横浜の絹織物商で、写真1の実物衣裳の中

にもある刺し子で刺繍付きのドレス・ガウンを明治の早い時期から欧米に輸出して成功した後、その財産を以降の染織産業の存続のために使った人であるということを説明した。その後、4代目の秀總氏が再建した現在の椎野正兵衛商店のプロモーションビデオ「150年の時を越えて蘇るジャパンプランドの先駆けS.SHOBAY（エス・ショウベイ）」（2009年、株式会社パーム制作）を視聴させ、生徒に正兵衛はなぜ世界の人々を魅了するような素晴らしいガウンを作ることができたのかを考えさせた。絹織物の輸出に際して、日本のキモノをそのまま輸出するのではなく、市場調査を通して、欧米の人々にどのようなものが喜ばれるのかということを考え、最善を尽くして丁寧に作ったものを売り出すというように、使う人のことを考えて作ったからこそ成功を収めることができたということを理解させ、正兵衛の「ものづくりの精神」について生徒の考えを深めた。

#### ②染織文化の伝統の継承ということ

図柄がマンネリ化し、衰退していった友禅染に新たなデザインを加えることで復活させた十二代目西村總左衛門や困窮していた日本刺繍の技術者に仕事を提供し、助け育てることで日本刺繍の技を伝えていった三代目飯田新七を取り上げて、明治期には横浜と並んで京都が染織文化を継承発展させる拠点であったことを理解させた。

また、明治期に良質の輸出用薄手絹地の産地として名をはせた福島県の川俣町に、世界一薄いといわれる絹織物「妖精の羽」を開発して欧米の有名ブランドに納品し、機織業を復活させようとしている齋栄織物という会社があること、さらには、現在では殆ど見られなくなっている19世紀のジャガード織機を使って、古い技術をそのままの形で残そうと尽力しているフランスのリヨンの織物会社の社長ヴェルジュ氏など、様々な方法で染織文化の継承を果たそうとしている人たちがいることを紹介し、伝統文化を伝えることの難しさややりがいについて説明した。

高校1年生である生徒たちも、だんだんと伝えられる立場から伝える立場へと自分自身を変化させねばならない時期に来ている。今回の「ものづくりの精神」について学んだ後の保育園訪問は、「もの」を通して、人生の先輩として園児たちに何かを伝えてもらいたいと考えた。

#### (エ)「指導計画④の8時間」の内容

「指導計画④の8時間」では、「ものづくりの精神」と「伝えることの大切さ」を学んだ自分たちだからこそできるプレゼント製作になるように生徒を方向づけた。製作グループは1～5歳の年齢別とし、1グルー

プ4人で絵本などのプレゼントを製作させることに加えて、クラス全員で大きなタペストリーも製作することとした。

### ①プレゼントの製作にあたって

保育園訪問時に持参するプレゼント製作に取り掛かる前に、次の4点について、考えさせた。

- (i) 「ものづくりの精神」について、学んだ自分たちだからできること
  - (ii) 手作りについて、手作りの良さとは
  - (iii) 布地について、布地の良さとは
  - (iv) 伝えるということについて
- 以下に生徒が話し合った内容を示した。

#### (i) について

- ・使い手を思いやって子どもたちに楽しんでもらえるものを作る。
- ・使い手のことを考えて心を込めて作る。愛情を注いで作る。
- ・子どものことを第一に考える。それが作品に命を宿すことに繋がる。
- ・心を豊かにするものを作る。
- ・素材を活かす。
- ・ものづくりに誠意を持って取り組むことで、子どもたちに、そして私たち自身にも、ものづくりの精神の大切さをわかってもらう。

#### (ii) について

- ・愛情が直に伝わってくる。作り手の気持ちが込められる。
- ・大量生産や効率を考えなくていいので、細かいところまで工夫を凝らせる。
- ・作った過程が想像しやすく、温かみを感じる。
- ・世界に一つしかないものができる。
- ・作る人も使う人も楽しめる。
- ・あじがある。
- ・市販にはないアイデアも出せる。
- ・人をひきつける。
- ・自分のために作ってくれたと思うと愛着がわく。
- ・作り手のあたたかみや愛情を受け取る側に伝えることができる。

#### (iii) について

- ・あたたかみが伝わる。
- ・安全である。
- ・触って安全に楽しめるし手触り自体も楽しめる。・触り心地が良い。質感のよい肌触り。肌を守ってくれる。
- ・やわらかいためとつきやすい。
- ・ボリュームとインパクトが出る。
- ・枕にできる。体にやさしい。
- ・紙などと比べて丈夫。
- ・愛着がわく。
- ・絹や綿などの多種多様な素材を使うことによって感受

性がはぐくまれる。

- ・加工しやすい。いろんな形にできる。簡単に手でも縫うことができる。

- ・どんな形にも変化して、おしつけがましいところがない。
- ・保温性がある。
- ・肌を守ってくれる。
- ・人に寄り添うような雰囲気がある。

#### (iv) について

- ・私たちが「本当に楽しんでもらいたい」と思っていることを伝えたい。
- ・手作りの大変さ。
- ・日本の文化。
- ・人と人のつながり。
- ・日本の言葉遊びの文化について伝えたい。
- ・人間のあたたかみ。
- ・家族愛、愛の大切さ、愛が全て。
- ・物を大切に作る心。
- ・我々の4歳児に対する努力。
- ・日本に昔から伝わる材料=絹のあたたかさなど。

上記の文章には、生徒たちの気持ちの中にまだ会ったことのない保育園の子どもたちへの愛情が生まれてきていることと、「ものづくりの精神」に示されている「使い手のことを考えて作ろう、そうすることでものに命を宿し、いいものに仕上がる」という考えを表現していこうという気持ちが強いことがよく表れている。

### ②完成したプレゼント

#### ア、クラス全体で製作したタペストリー

写真2に示したクリスマスツリーのタペストリーは、まず3人の生徒が中心になってクリスマスツリーやオラフ（雪だるま）・雪の部分を作っておく、そこにクラスの生徒が布を使って作った小物をマジックテープで貼り付けられるようにしていく、という手順で完成させたものであった。

#### イ、幼児の年齢別に製作した絵本・おもちゃの例

写真3は、各グループの生徒が対象とした幼児の年齢に合わせて製作した絵本、ポーリングゲーム、的当てゲーム、すごろくなどである。作品の様々な部分に布を使う工夫がなされており、生徒が色合いや手触りのよさ、そして安全性について配慮しながら製作したことがうかがわれた。

### ③出来上がったプレゼントの発表

年齢別に出来上がったプレゼントについて、どんな特徴があるのかなど作品の説明と、製作途中の気づきや感想を発表する時間を設けた。生徒の気づきや感想は次に示したとおりである。



写真1 授業で使用した明治期の輸出用刺繍キモノの例



写真2-1 クリスマスツリーのタペストリー



写真2-2 タペストリーを飾ってゆく園児たち

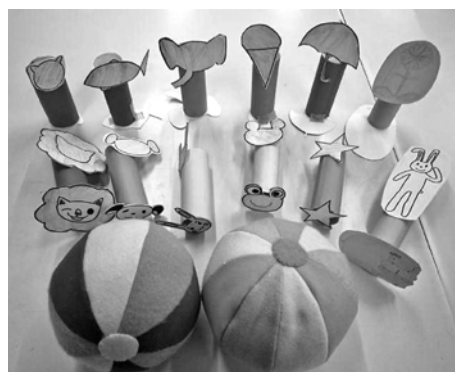
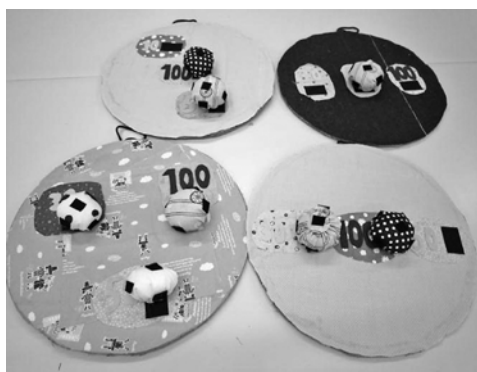


写真3 生徒が製作した絵本と布のおもちゃ

(i) 子どもたちのことを考えて作ったこと

- ・例えば音が出るように工夫したり、可愛い動物を隠れさせてみると、なるべく色々なところに興味を持ち、楽しく遊んでもらえる工夫をした。
- ・絵本はストーリーをなるべくシンプルにしたり、わかりやすいことばを使うように心がけた。
- ・子どもたちに伝わりやすい表現、絵、効果音など考えるのは大変で難しかった。
- ・何度も失敗して大変だなあとあきらめに近い感情を持って完成したら喜んでくれるのかなと思うと頑張れた。

(ii) 自分たちにも効果があったこと

- ・手作りは時間がかかるし大変だがどうしたら安全に遊んでもらえるか、どんなものが好きなのかなどと考えることで、幼児について学ぶことができた。
- ・子どもたちが遊んでいる様子を想像しながら作ることで優しいような嬉しいような気持ちになることができた。
- ・最初はやらされている感じが満載だったが、作っている途中から自然に工夫できるようになり、完成したときはとても嬉しかった。
- ・グループで作ることで、一つの目的への団結力を感じられた。

以上の感想から、生徒には「子どもたちのためにもものを作る」という目標ができ、使い手のことも具体的に考えられるようになったことがうかがわれた。しかし、園児のためにと意欲的に作り始めたが大変なことも多く、製作しながら生徒たちの心には様々な変化が生じたようである。最終的には、手作りには作ってもらう人だけではなく作る人をも幸せな気持ちにしていこうという「ちから」があること、それが人と人とのつながりをより深めることになるということに殆どの生徒が気づいたことは成果の一つである。

(オ)「指導計画⑤の2時間」の内容

①ももやま保育園への訪問

12月11日には、製作した絵本やおもちゃを持って附属福山高等学校の近所にある「ももやま保育園」を訪問した。生徒には始めは緊張した様子も見られたが、子どもたちの嬉しそうな声掛けや表情を見ることで、表情もすぐに和らいでいった。それぞれの教室から絵本を読み聞かせる声や、園児のにぎやかな笑い声が聞こえてきていた。園児の笑顔と共に生徒たちの自然な笑顔が印象的だった。

②保育園訪問を終えて

保育園訪問後の生徒には、子どもたちとコミュニケーションをとることができて嬉しそうな様子やプレゼントを喜んでもらえ達成感を感じている様子などが見られた。手作りのプレゼントを介しての交流を通し

て、幼児と生徒のそれぞれが得たものは大きかったようだ。生徒が絵本やおもちゃづくりを通して園児に伝えたかったことは、言葉では示せなかったかも知れないが、製作品の中にしっかりと盛り込まれていた。工夫を凝らして一生懸命作った絵本やおもちゃからのメッセージは、子どもたちに十分伝わっていた。それが生徒たちにも実感できていたからこそ達成感につながったのであろう。

最後に、一連の学習を通して生徒たちが「布の良さ」と「ものづくりの精神」についてどのように考えるようになったのか、ということについて述べたい。下表の学習のまとめが示しているように、「布の良さ」については、作った絵本などで幼児と遊んでみて改めて実感したこと、そして「ものづくりの精神」からは人々を取り巻く環境が目まぐるしく変化していく社会にあっても、自らを見失わない土台となる考え方を得ることに繋がる、と理解したことがうかがわれる。

「学習のまとめ」からの抜粋

(i) 今回の製作を通して布の良さについて発見したこと

- ・布絵本を作ったが、出来上がってみると肌触りが良く、ふわふわしており、子どもたちは触ったり抱き着いたりして遊んでくれてとてもよかった。
- ・布絵本に対する園児たちの反応がとても良かったし、安全だった。安心して見ていることができて、布で作ったことによって製作者の暖かみも伝わった気がした。
- ・絵本を作るとき絵が苦手だからどうしようかと思っていたが、布を貼るだけでページが華やぐという利点があった。また立体感も出るし、しかけも作れて1ページの中でも動きをつけることができた。
- ・布を使うとダンボールが華やかになって、子どもたちもそっちに多く集まっていたので、布には見る人の興味を惹きつける力があると思った。絵本の文字をフェルトで作った所は、子どもたちが楽しそうに触っていてそれを見てとても嬉しかった。
- ・今回の製作を通して新たに発見した布の良さは、色の豊富さである。同じような色の布でもそれぞれの材質が異なると少しずつ違って見え、仕上がりがより深みのあるものになった。

(ii) ものづくりの精神をどのように考えるか。自分の生活と関連させて思うことはどのようなことか。

- ・「もの」を使っていたく人のことを最優先で考える精神と言い換えることもできるなと思う。そして頑なにならなければ誰にでも芽生えるものではないか、と思う。料理も洗濯も掃除も、日常生活の全てが「ものづくりの精神」と重なる部分が多いような気がした。また、本当に良いものというのは、「ものづくりの精神」なしでは作ることができないのではないかと思った。
- ・言葉よりも伝わりにくいけど、言葉のようなものだと思う。でも、作る方は言葉よりも心を込めているし、

受け取る側は言葉よりも読み取る力が必要だと思う。あとことばと違うのは作る方にもかえてくるものが大きい。感謝の気持ちをいつも持つこと、そしてそれを伝えることを大切にしたいと思った。

- ・最近では身の回りが人工的に大量生産された物、機械によって作られた物ばかりになっているなど、改めて見回してみても思った。今回の授業で、手作りのものの暖かみ、良さ、作った人の込めた思いなどがとても感じられた。手作りっていいなと思った。自分の生活はとても味気ないものを感じられてしまった。帰ったらおばあちゃんが編んでくれたセーターを着よう。人の心を支えるには、特定の人が特定の人のために何かを作るということがとても大切だと感じた。
- ・向上心、より良いものを作ろうという気持ち。何事も努力して、より良くしていくことが重要であると思った。努力すればした分だけよいものが出来上がり、それに満足せずにもっと高みを目指すということは、自分の生活においても大切だと思った。
- ・何でも自分の手で作ってみることが大切だと思った。自分の周りには既製品があふれているので、それを作るまでの過程とか大変さがわからないことが多い。でもその製品を完成させるまでには多くの人が関わってより良いものを作ろうと努力している。今回作ってみてそのことに気づくことができ、周りのものに愛着が湧いてきた。
- ・まずは身の回りのものが何を考えて作られているのかを知っていこうと思った。そこには必ず誰かの思いがあるはずなので、何も考えずに道具として使うだけよりもその方が面白い。そして後々は、自分が生み出すものにも「ものづくりの心」を込められたらと思う。
- ・人の心を豊かにするために人のことを思ってももの作りをする。その心はその人を、相手を、社会を幸せにすることに繋がると思う。人のために努力、地道な作業、困難の突破を行うことは、思いやりの心を持つ人でないといけない。自分を思いやりの心がある人だと思ったことはない。まず今回人のためにものを作る経験をしたので、このとき感じた嬉しさを忘れないでおきたい。そして日頃、他者のものづくりの心を感じ、感謝しながら生活することが思いやりの心を持つ人になるための一歩だと思う。

### ③教師による今回の保育園訪問についての省察

毎年、「人の一生と家族・家庭及び福祉」の学習として、保育園に訪問を実施している。その際には、手作りの絵本やおもちゃを持って行くのが常であったが、今回初めて、ものを作るということの意味を考えさせ、その後に製作するという流れで授業を進めた。その結果、次のような効果があった。

例年だと最初は意気込んでいても途中で改良の余地があっても終わってしまうというようなグループが出てくるが、今回はより良いものを製作したいという意欲

が最後まで持続した。その分、従前よりも良い作品が完成したように思われる。また、今回初めて、班で作るだけではなく、クラスで一つの大きな作品を仕上げるということにも挑戦させた。写真2のクリスマスツリーのタペストリーである。これの製作では、多くの人で一つのものを作るという過程において、個人の小さなちからが総和となり、大きなちからが生まれる、ということを実感させたいと考えた。この取り組みを通して、生徒の「ものづくりの精神」に対する思いはより深まったと考えている。生徒が大きな達成感を得たことは、子どもたちが喜んでくれることを想像しながら製作することができたためであり、ここに今回デザインしたものづくりの学習の効果がみられる。

## II. アンケート調査からみた学習の効果

今回の授業の効果をより客観的に把握するために、先述の担当教師の観察や省察に加えて、指導計画の①が始まった平成26年9月11日及び同③が終わった10月9日に、それぞれ2種類のアンケート調査を実施した。9月11日実施の2種類の調査は、指導計画の①～③の学習効果を捉えるための事前調査を目的としたものと、当日に視聴させたビデオや使用した教材への興味・関心の程度を知るためのものであった。また10月9日実施の2種類の調査は、9月11日の事前調査と同じ質問項目を立てて事後調査としたものと、日本の染織文化に見られる「ものづくりの精神」を理解しているかどうか、さらにはその精神を生かして保育園訪問時にプレゼントする布の絵本やおもちゃ製作に取り組む心構えができていくかどうかについて知ることを目的としたものであった。なお、アンケートの全項目は、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までを5段階に分けて、5点から1点を与える5件法にした。

紙幅の都合上、調査結果の全部を記すことはできないため、10月9日実施の「日本の染織文化への理解・ものづくりの精神・布を用いた製作をつないだ学習」に対する興味と理解に関する調査結果を表1に示し、また図1には、*t*検定の結果学習の事前と事後で1%の危険率で有意差の見られた質問項目のみを取り上げて、グラフで示した。

表1のデータが示しているとおり、日本の染織の伝統と文化を「輸出用キモノ」の視点から見出し、そこに潜んでいる明治の絹物商の「ものづくりの精神」を発見して敬服し、その心を受け継いで保育園児へのプレゼントを製作する際に生かす、という今回の学習は、生徒に心の変容をもたらす意義あるものであったといえる。



表1 染織文化・ものづくりの精神・布を用いた製作をつないだ学習に対する興味と理解

質問項目	とてもそう思う	ややそう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
1 NHK番組『ファッションデザインのジャポニスム』に興味をもつことができたか	9 (22.5)	25 (62.5)	4 (10.0)	2 (5.0)	0
2 20世紀初頭の欧米において、コルセット付きの窮屈な衣装がゆとりのある衣装に変化した際に、キモノの影響があったことが理解できたか	22 (55.0)	17 (42.5)	1 (2.5)	0	0
3 NHK番組『美の壺・刺繍』の視聴により、日本刺繍の歴史を理解することができたか	14 (35.0)	22 (55.0)	3 (7.5)	1 (2.5)	0
4 キモノに施された刺繍を見て、心を込めてものを作ることが人間にとって大切であることを認識したか	27 (69.2)	10 (25.6)	1 (2.6)	1 (2.6)	0
5 明治期の輸出用絹製品に、なぜ刺繍がなされていたのか、理解することができたか	11 (27.5)	22 (55.0)	2 (6.0)	1 (2.5)	0
6 今回の授業を通して、キモノの持つ「ちから」に対して敬意の念をもつようになったか	15 (37.5)	18 (45.0)	5 (12.5)	2 (5.0)	0
7 今回の学習から、自分も針と糸を持って生活を豊かにする布製品を作りたいと思うようになったか	7 (17.9)	12 (30.8)	12 (30.8)	6 (15.4)	2 (5.0)
8 椎野正兵衛のビデオ視聴から、日本の絹や絹製品の素晴らしさについて理解できたか	21 (52.5)	16 (40.0)	3 (7.5)	0	0
9 椎野正兵衛のビデオ視聴や学習から、明治時代の絹製品の欧米での魅力について理解したか	17 (42.5)	21 (52.5)	2 (5.0)	0	0
10 ビデオ視聴や学習を通して正兵衛の『ものづくりの精神』について理解することができたか	14 (35.0)	22 (55.0)	3 (7.5)	1 (2.5)	0
11 正兵衛の『ものづくりの精神』を現代の生活に生かしていく必要があると思うか	21 (52.5)	15 (37.5)	4 (10.0)	0	0
12 アメリカの美術館の所蔵品であるキモノの写真を見て、明治時代にたくさんのキモノが欧米に渡り、現在まで保管されてきたことが分かったか	23 (57.5)	14 (35.0)	3 (7.5)	0	0
13 明治期に輸出されたキモノの実物観察や使用されている布地の厚さを測定することによって、この時代の絹織物をよく観察できたか	19 (47.5)	18 (45.0)	3 (7.5)	0	0
14 川俣町の齋栄織物やリヨンのジャガード織りのビデオを見て、伝統の技の継承のために努力している人たちの気持ちが理解できたか	10 (25.0)	28 (70.0)	2 (5.0)	0	0
15 日本のキモノ、絹織物、刺繍は後世に伝えて行かなくてはいけないものだと思う	28 (70.0)	12 (30.0)	0	0	0
16 日本のキモノ、絹織物、刺繍の継承のために私たちにもできることがある	15 (37.5)	16 (40.0)	9 (22.5)	0	0
17 ももやまの子どもたちのためのプレゼント製作にものづくりの精神を生かしたい	20 (50.0)	19 (47.5)	1 (2.5)	0	0
18 ももやまの子どもたちのためのプレゼント製作に布のよい点を生かしたい	19 (47.5)	18 (45.0)	3 (7.5)	0	0
19 これからの生活のために色々な縫い方を少しずつでも身につけていきたい	15 (37.5)	20 (50.0)	5 (12.5)	0	0
20 ものづくりの精神は持続可能な社会の実現について考えていくための基になる考え方につながっている	20 (50.0)	17 (42.5)	2 (5.0)	1 (2.5)	0

(注：セルの上段は人数で、括弧内は%である。)

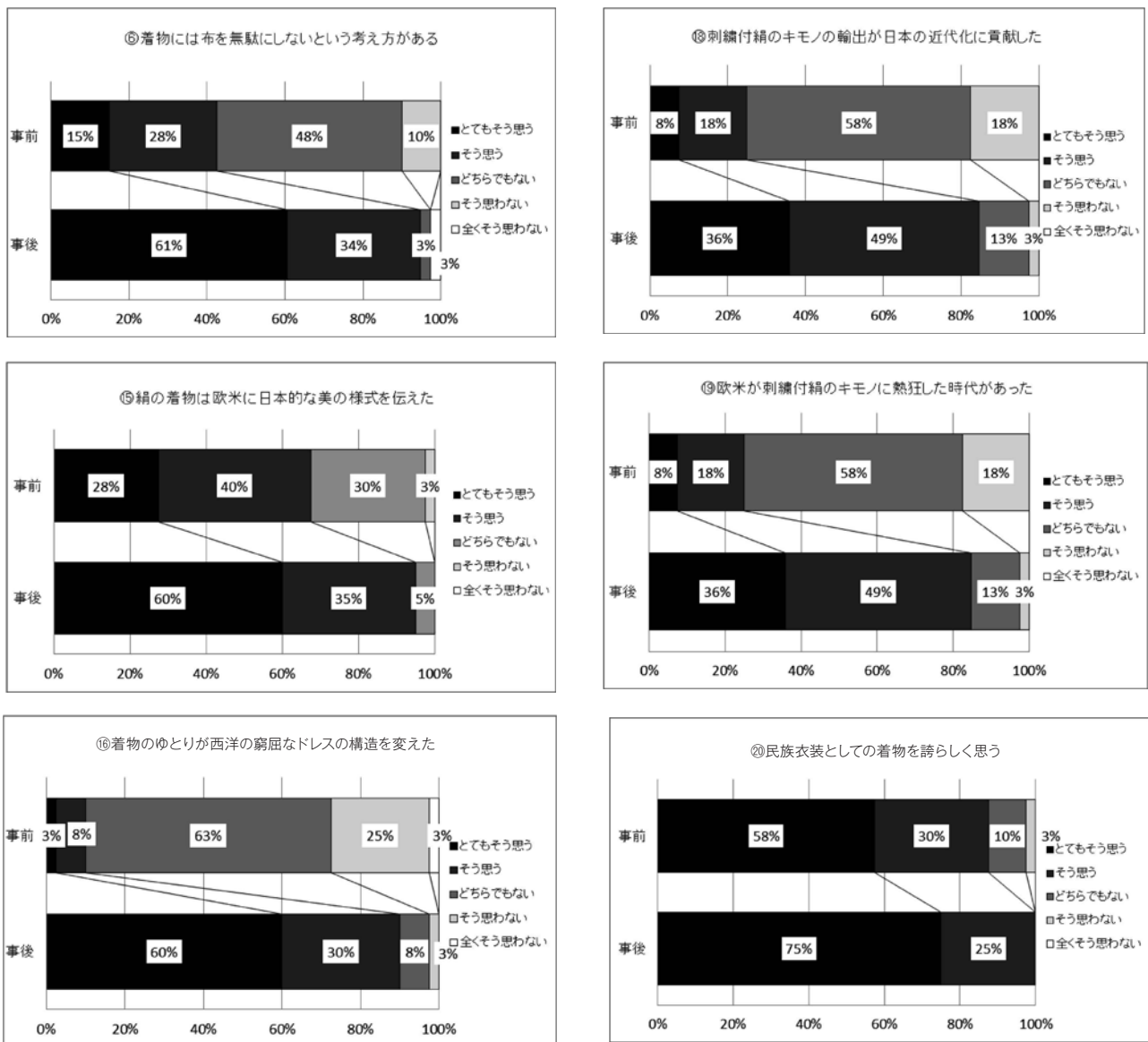


図1 授業前・後の意識と理解の比較（1%の危険率で有意差有）

そして、図1が示すように、*t*検定の結果、授業前と授業後の意識について1%の危険率で有意差が見られたのは、「⑥着物には布を無駄にしないという考え方がある」、「⑬着物は欧米に日本的な美の様式を伝えた」、「⑭着物のゆとりが西洋の窮屈なドレスの構造を変えた」、「⑧刺繍付きの絹のキモノの輸出が日本の近代化に貢献した」、「⑩欧米が刺繍付きの絹のキモノに熱狂した時代があった」、「⑭民族衣装としての着物を誇りに思う」という質問項目においてであった。これらの項目は、すべて「キモノのちから」というものを具体的に示していると考えられることができる。このように今回デザインした授業は、「キモノのちから」と「ものづくりの精神」を発見し、製作を通して日本の染織文化を未来に繋ぐことを可能にするものであると評価できる。

### おわりに

今回の研究を発展させて、次年度は保育園訪問時に持参するプレゼントとして、「はっぴ」を製作させたい。

なぜ「はっぴ」かということについては、アメリカにおけるファッションのジャポニズムと関係づけて説明することができる。日本から輸出されたキモノ風室内着に影響されて、アメリカでは、着物とは異なる構成を持ち裁ち縫いが非常に簡単な、まるで「はっぴ」のようなローブが生まれ、定着していったというのがその理由である。

### 参考文献

- 1) 椎野秀總, 青山弦『日本初の洋装絹織物ブランド S・SHOBEY』, 椎野正兵衛商店, 2012.